近世後期上方語におけるテルをめぐって

増井典夫

本論文では、主に近世後期上方語でのテイル・テルの使用状況及びテオル・トルの使用状況を見ていくが、特に「上方語でのテルの使用」を確認したことを、特筆事項として記しておきたい。

一、はじめに

現代の関西方言で、「完了（結果の継続）」及び「進行（状態の継続）」を表すアスペクト表現として「トル」を用いる地域があることは知られているが、「トル」ではなく基本的には「テル」を用いる地域もかなりある。特に、京都や大阪など近畿中央部の方言として広く見られるようである。これは、必ずしも共通語の影響でそうなったのではなく、近世のころから地域の言葉として用いていたようである。

一方、筆者は滋賀県方言話者であるが、アスペクト表現として基本的に「トル」を用いてきた。（これは男性だからであり、女性はテルの方をよく用いるのかもしれない。）（なお、「ヨル」の用法は卑語であり「主観や判断を表すヨル」という点で、中部地方の用法と近い。[1] この点は京阪での用法と共通する。）

二、江戸語でのテル

まず、江戸語でのテルを確認しておく。

東京語（共通語）でテルを使用していることは周知のことであろうし、明治期においてもテルは標準的なものととらえられていたかと思われる。

明治期の国語学者、保科孝一はテル（及びトル）を口語の標準的な音韻変化としている。

テイル、デイル、テオル、デオルわ、実際発音する際に、食

ツテル、死ンデル、枯レトル、遊ンドルという様に、融合することがある。（『日本口語法』304頁）、（明治四四・一九一一、同文館、〈勉誠出版より復刻〉）

この記述のあとに、次のような記述がある。

僕ワ、花ワ、コレワ、ソレワ、酒ワ等の形式が、実際の発音において、ボクア、ハナー、コリヤ、ソリヤ、サケーという様に融合することがある。然しこれわ鄙俗の語であるから標準語としてわ取ることが出来ない。

食ツテシマツタ、取ツテシマツタ、行ツテシマツタ等の形式が、実際の発音において、クツチヤツタ、トツチヤツタ、イツチヤツタという様に融合することがある。これも鄙俗の語であるから取ることが出来ない。（略）

固より中にわ標準的のものと認められないものがある。例えば、ボクア、ハナー、サケー、クツチヤツタ、行ツチヤツタという様なものわ、標準語としてわ捨てなければならん。けれども、その他のものわ、すでに標準的のものになつて居るから、之を捨てることが出来ないのである。（同書、305～306頁）

このように保科はテル（及びトル）を標準語とみなしているわけである。

その前の時代、江戸語でテルを用いていたこともよく知られているかと思われる。

『江戸語大辞典』（前田勇編、一九七四年、講談社）でも、

てる　は「ている」の約。

との記述がある。そこで挙げられている例は次のようなものである。

○ 墨　かくしなさんなよくしつてる。（「妓者呼子鳥」、安永六・一七七七、『洒落本大成』7、114頁下6）

○ 庄　角左ヱ門がそばについてゝちつともはなさず（「青楼五雁金」、天明八・一七八八、『洒落本大成』14、224頁下16）

江戸語としてテルは広く一般に使用されたものと認めてよいかと思われる。

三、近世後期上方語でのテイルとテル

さて、京都・大阪でのテルである。京都方言としての記述では、例えば『近畿方言の総合的研究』（楳垣実編、一九六二年、三省堂）では、

京都市はじめ、山城・口丹波の一部分では、雨ガ降ッテルの形で、継続態を表わす。これは東京語と同じ形のものであるが、必ずしもその影響であるとはいえない。（「京都府方言」、288頁、奥村三雄執筆）

というように記述されている。一方、大阪の方言としては、例えば牧村史陽編『大阪ことば事典』（一九七四年、講談社）では、「テル（助動）ている。」などとして記述されている。

上司小剣の作品を見てもテルが多く用いられていることがわかる。例えば「鱧の皮」（大正三・一九一四）では、

○「……また金送れか。分ってるがな。」（（岩波文庫『鱧の皮他五篇』37頁）

○「阿呆らしい、何言うてるのや。」（同37頁）

のような例が多く見られる。このように、近代において京阪ではテルが一般に広く用いられている。

一方、上方語におけるテルについてであるが、前田勇編の『上方語源辞典』（一九六五年、東京堂）の「てる」の項には、

〔語源〕テイルの約。近世の用例未見。

とある。また、『近世上方語辞典』（前田勇編、一九六四年、東京堂）には、テルの記述はない。近世の上方語では、テイルの使用が一般的であったと思われる。

なお、湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』（一九三六年、刀江書院）150頁）を見てみると、「おる」の項に、

「ておる」の例は余り多からず、その場合には「て居る」を用いるのが普通である。

などと記述され、上方語において、テオルよりテイルの方が一般的だったことが窺える。

このように上方語では基本的にテイルが用いられ、それは文化年間頃までは、変わらなかったかと思われる。しかし、次のように、文政年間頃からテルの使用も出始める。

まず先に、大坂での例を挙げる。次の例は洒落本「粋の曙」（文政三・一八二〇）のものである。

① 露　そんなら来年あたりはどこぞの娘になってるであろふ（『洒落本大成』26、294頁下3行）

② 巴　……夫に大吉でそちをよんだらしってる通こゝの親父の叮嚀しや此間のをあてつけによぶよふでわるいから（同、298頁下16）

なお、①の露雪（露）は「男がゑいとつらい物じゃナ」（295頁下5）などと、②の巴調（巴）も「いわぬかへそんな事いうたとて腹たてるよふな事はせぬ」（299頁下1）などといった話し方をする、共に一般的な大坂人と見られる人物である。

また、元治（一八六四～一八六五）前後の滑稽本である「穴さがし心の内そと」の、

③キク　是モウみな袷になってるぜ（三編、『近代語研究』第四集475頁9行、一九七四年、武蔵野書院）

④キく　ソレハけつかふ〳〵〳〵〳〵硫黄木やの手間取と来てる（同、475頁14）

⑤　平助…庄六さん一荷往てんか堀江の下の高ばしのあたりに泊ツてる五平次船へやっておくれ（同、483頁6）

といったテルの例が見られる。なお、⑤の平助は「往てんか」などと大坂らしい話しぶりをする人物であるし、③④の菊八も「ア、ゑらい蚊じゃ」（475頁1）「置やが質やになるよって」（475頁10）など、やはり大坂らしい話し方をする人物である。

これら用例を見ると幕末の大坂では、かなりテルが一般化してきていたかと思われる。

なお、次の例は江戸者の使用例である。

○手　そふだろふけれど今私がしてる此玉ぐさりなぞア地がわりいから（同、482頁10）

こういった例があったことから、上方語としてテルを認めることに慎重な向きもあったかもしれないとは思われる。

一方、京都の例だが、洒落本を見ると、「箱まくら」（文政五・一八二二、『洒落本大成』27）という作品では、テイルは見られるが、テルは見られない。

「老楼志」（天保三・一八三二、『洒落本大成』28）という作品でも、次のように、テイルは多く見られるが、テルは見られない。

○清　……大かたとけて浮てゐるじゃあろ（322頁下6）

○半　あいつ大分気がきいてゐるナア（同下9）

しかし、「興斗月」（天保七・一八三六）という作品を見ると、

⑥浅…かごやがまってるへ（『洒落本大成』29、137頁下4）

とテルの例が見られる。また、「千歳松の色」（嘉永六・一八五三、『同』29）という作品でも、

⑦つる……しかしもうおいでゝはあらふとおもふてるけれど

（320頁上6）

というテルの例が見られるのである。

このように、幕末に近い頃の上方では、京坂共にかなりテルが用いられるようになっていたのではないかと思われる。

なお、「興斗月」作品の資料性を問題にしたことがあるが[2]、「千歳松の色」という別作品でもテルが見られることもあり、今回取り上げた点については問題ないと思われる。

四、テオルとトル

ここで、テオルとトルについて見ておく。

まずテオルについてだが、『徳川時代言語の研究』には、「おる（居る）」の説明の一部として、次のように記述されている。

動詞の連用形・音便形を承けた「て」に附いて、之と共に「て居る」と同じ意に用いられる。（149頁）

用例として「返報する、覺えておれ」（心中天の網島）」といった例などが挙げられているが、先に見たように「テオルの例は余り多くない」としている。

一方、トルについてだが、『上方語源辞典』には、

とる《助動ラ五》動詞連用形につく。…ている。…ておる。「そんなとこで何しトンね」「ようわかっトります」

のような記述がなされている。

一方、『京都府方言辞典』（中井幸比古編、二〇〇二年、和泉書院）では、「トル」について次のような記述がみられる。

京や京より南では卑、かつ、京ではテヨル・トールが多く、トルはやや少ない。

また、『近畿方言の総合的研究』では、

丹波から丹後へかけて、一般に、降ットル形が用いられる。これは、山城地方でも、かなり使用されるし、京都市でも或る程度使用される。テル・トル並用地域では、トルが男性語的性格をもっている。このトルはラ行五段に活用するが、テ居ルの約まった形として当然のことである。（「京都府方言」、288頁）

などとあり、『大阪ことば事典』にも、「トル」は「しておるの約である。トォル。」などとある。そこで「トォル」の項を見ると、

ておる。キトォル（来ておる）・カイトォル（書いている）などと使用し、「今書いトォンや」（今書いておるのだ）などとも発音するが、これは主として男、男の子の用語に見られるものであって、普通にはキテル（来ている）・カイテル（書いている）と使う。一方このオルがヨルとなり、キテヨル・カイテヨルともなるが、これは多少軽蔑の意を含んでいる。

などと記述されている。

さて、トルの近世での用例であるが、

◎ばんとう「わたしも、きのうのけんかは對人（あひて）を知居（しつと）りますが（『浮世風呂』文化六・一八〇九～文化十・一八一三、『日本古典文学大系』六三、249頁）

という例が上げられるほか、なかなか他の例が見られない。（『日本国語大辞典』にはもう1例、享保年間（一七一六～三六八）の「雑俳・智恵車」での「渋団・裸で橋で涼んどる」という例が挙げられている。）（上記のどちらの例も、上方者ではなく西国者の例かも知れない。）

『近世上方語辞典』には、テルの記述がないほか、トル（及びテオル）の記述もない。（オルの記述もないのだが。）

近世においては京都大坂共にトルはほとんど用いられなかったのかもしれない、とも思われる。

五、西日本方言でのオルとヨルについて

ところで、『徳川時代言語の研究』には、先の「ておる」の記述から続けて次のような記述がなされている。

【注意】「ておる」の例は余り多からず、その場合には「て居（ゐ）る」を用いるのが普通である。

この場合に「て」を略して、「読みおる」「書きおる」の様にする言方は、京阪地方には用いないが、地方には行われたものらしい。「忠臣金短冊」（享保十七年豊竹座上演）第三に、大岸力弥が島原の遊女屋に訪ねて行って、「然らば（吾ハ）爰に待ちおらふ」と言うに対して、亭主の女房が応待した詞が、

◇お若衆の待おろはお國詞か、そんなら私（わし）も勝手へ立ちおらふ。デエお茶くんで来をらふと、ひんしやんとして入りにけり。

と見える。これは京阪地方で「待っておろう」と言うのを、「まちおろ」と「て」を抜いて言った為に、わざとからかったのである。（150頁）

さて、現代の西日本方言のアスペクト表現では、

トル	完了（結果の継続）
ヨル	進行（状態の継続）

の意味・用法を持つとされている。例えば工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』（二〇〇四年、ひつじ書房）には、

京阪地区を除く西日本の広い地域に分布する方言では、〈進行〉は「桜の花が散りよる（散りよー、散りゆー）、〈結果〉は「桜の花が散っとる（散っちょる、散っとー）のように、別の形式で表し分ける。（『同書』2頁）

とある。

先の湯澤の「待おろはお國詞」云々についての記述は、西日本方言の、進行態のヨルにつながるオルの記述かとも思われるものである。

なお、湯澤は【「おる」の補助的用法】の記述として、

動詞・活用連語の連用形に附いて、動作主を卑しめ詈る意を表す。（同書149頁）

とし、

【注意】「おる」が「よる」となることがある。（同）

と記述し、曾根崎心中（元禄一六・一七〇三年）の、

○さりながら大方まづ済みよつたが、一部始終を聞いてたも

（『近松全集』四巻13頁）

等の例を挙げている。

上方及び近畿中央部とそれ以外の西日本のオル・ヨルの用法の分化が、近世において既に窺えるようにも思われる。

ところで、保科は、ヨルについて次のような記述を行っている。（なお、保科は「関西」という言葉を「西日本」の意味で用いているようである。）

関西地方では、進行現在の形式として、食ヒ居ル、見居ル（実際の発音においては食イヨル、見ヨルといって居る）といふのを、食ットル、見トルといふ、現在の形式から区別して用ゐて居るところが多いが、関東地方には、この区別が殆ど存在しない。例へば、猫ガ死ニヨル、火ガ消エヨルと、猫ガ死ンドル、火ガ消エトルの区別は、関西地方には存在するが、関東地方に

はないのである。（『国語学精義』、明治四三・一九一〇、同文館、288頁）

このように、保科はトルを「現在」の形式、ヨルを「進行現在」の形式として捉えているわけであるが、「ヨル」は上方語では当初から待遇表現として用いられていたものであり、明治期より前、近世において既に、上方語と西日本方言とでは、ヨルの用法は違う枠組みで説明されるべきであったのではないかと考えている。

六、テルとトルについて（まとめ）

アスペクト表現として上方語では、京都でも大坂でもテイルまたはテルが一般的である。上方語でのテルの存在は、これまで指摘されなかった点であり、この指摘によって例えば「テルという縮約形が江戸語のみにみられる」（迫野虔徳『文献方言史研究』224頁、一九九八年、清文堂）といった記述も修正の要が出てくると思われる。

ところで、工藤真由美の記述に次のようなものがある。

京阪方言では、人の存在を表すのに「イル（イテル）」「オル」という二つの存在動詞を使用することから、アスペクト形式も、シテルとシトルの二つの形式が、文体差、待遇差、感情・評価性の違いを伴いつつ使用されている。シテルろうとシトルであろうと〈進行〉〈結果〉の両方を表すという点では、西日本方言型ではなく標準語型である。（『方言の文法』〈シリーズ方言学2〉二〇〇六年、岩波書店、「第三章　アスペクト・テンス」104頁）

京都及び大阪では、テル及びトルは使われ始めた当初から、右の記述の通り〈進行〉〈結果〉両方の意を表すものだったと思われる。（ヨルは当初から卑語として使われた。）ただ、トルは上方語としての用例は少なく、主に明治以降に用いられるようになったものかとも思われる。

なお、「アスペクト形式においてヨルが消滅し」「進行と結果の区別をなくし、トルに一本化」された、「ヨルはアスペクト的意味を失い、いち早く待遇的マークになった」「言語変化の大きな方向性としてはオル系「ヨル」「トル」はともにアスペクト表現から待遇表現のそれに移行しており、オル系「ヨル」「トル」として一括して扱いたい」などととらえる論考[3]があったが、上方語では、ヨルは当初からアスペクト表現ではなかったわけであり、先述の通り、トルはテル同様、当初から「進行」と「結果」両方を表すものだった、と捉える方が自然な考え方かと思われる。

七、おわりに（附・イテルについて）

テルについてはまだまだ上方語での用例を探していきたい。また、上方語及び関西方言のトルについてなども用例を探していきたいと考えている。

そのうえで、上方語でのアスペクト体系についてもう少し検討を続け、考察していきたいと考えている。

なお、近代京阪方言では「イテル」という言葉がよく使われる。上司小剣の「鱧の皮」を初めとする諸作品ではイテルの例は見られないが、『上方語源辞典』では、

いてる［居てる］①居るの継続態。「みんなまだ教室にイテル」②居る。「源さん、イテルか」

などとある。

また、『大阪ことば事典』では、イテルの項で、

居ているの約。否定形はイテヘン。ていねいに言うとイテハル。

と記述されている。

一方、『京都府のことば』（一九九七年、明治書院）（「Ⅳ　俚言」執筆中井幸比古）には、

イテル（居てる）〈京阪〉大阪市では、「居る」とほとんど同義で頻用するようだが、京都市ではあまり使わない。人によってときどき使うが、継続の意味を強めるような場合に限るか。例：「（私があなたの家に行くかも知れない、と言ったから、あなたは、わざわざずっと）イテトクレヤシタノドスカ（居てくださったのですか）」。（213頁）

などとあり、また、『京都府方言辞典』でも、イテルについて「京では使わぬでもないがイルがより普通。」と記述されている。

ところで、金水敏『日本語存在表現の歴史』（二〇〇六年、ひつじ書房）では、イテルの例として明治期大阪落語の例を挙げている。

○あんた、内去（うちい）なんと、わたいの傍（ねき）にばっかりいてとくれやすやろな（初代桂枝雀「煙管返し」、明治三六・一九〇三年）

○おい兄弟、うちにいててか。（四代目笑福亭松鶴「平の陰」、明治四〇・一九〇七年頃）

ただ、「大阪方言」の記述として、

実際には「いる」よりも「いてる」という形式がよく現れる。

「いてる」を「いて＋いる」と考えると、無意味な重複のように見えるが、これは、京都などで「―て＋いる」から「―てる」へと先進的に発達した状態化形式を用いて、「いる」が未だ十分に状態的になりきっていない地域の「いる」が状態化されたものと見ることができよう。（260頁）

とあるところは私にはよく理解できない。三節で見たように、大阪より「京都などでテイルがテルへと先進的に発達した」とは認め難く、テルの大阪での使用は京都と同時期か、むしろ先行した、とも捉えられるものである。また、「状態的になりきっていない地域のイルの状態化」という点についてだが、どういった論拠で大阪が京都よりも状態化がはっきり遅れていた、と言えるのであろうか。私の理解の及ばないところである。

なお、名古屋では、「おっとった、おっとれせん」（三遊亭円丈『ファイナル雁道』一九九二年、海越出版社）といった語形が見られるという。「おる＋とる＋た」、「おる＋とる＋せん」であろうが、このような語形も併せて検討していきたいと考えているところである。

注

（1）丹羽一彌『日本語動詞述語の構造』（二〇〇五年、笠間書院）での記述による。

（2）増井典夫「近世後期上方語における〝ちやった〟の扱いについて」、増井「近世後期上方語における〝ちやった〟について」（『国語学研究』45、二〇〇六年三月）において、作品の資料性を問題とした。

（3）中井精一「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」・「トル」の待遇化について」（『国語語彙史研究二一』二〇〇二年、和泉書院）の記述による。

主な参考文献（先に挙げた以外のもの）

井上文子『日本語方言アスペクトの動態』（一九九八年、秋山書店）
井之口有一・堀井令以知（編）『京都語辞典』（一九七五年、東京堂出版）
金沢裕之『近代大阪語変遷の研究』（一九九八年、和泉書院）
金水敏「日本語アスペクトの歴史的研究」（二〇〇六年、『日本語文法』六巻二号、くろしお出版）
工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテクスト』（一九九五年、ひつじ書房）
坂梨隆三『近世語法研究』（二〇〇六年、武蔵野書院）
陣内正敬・友定賢治（編）『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』（二〇〇五年、和泉書院）
寺島浩子『町屋の京言葉――明治三〇年代生まれ話者による――』（二〇〇六年、武蔵野書院）
中井幸比古「幕末期京都語について」（二〇〇七年、『新撰組　京都の日々』所

収、東京都日野市）
堀井令以知『京都語を学ぶ人のために』（二〇〇六年、世界思想社）
堀井令以知（編）『京都府ことば辞典』（二〇〇六年、おうふう）
増井典夫「近代語にみられる「トル」と「ヨル」について」（『愛知淑徳大学国語国文』30、二〇〇七年）
増井典夫「明治期口語研究の新展開に向けて――標準語と保科孝一、尾崎紅葉、そして「トル・ヨル」――」（『国語論究9　現代の位相研究』所収、二〇〇二年、明治書院）
柳田征司「近代語の進行態・既然態表現」（『近代語研究八』所収、一九九〇年、武蔵野書院）

（文学部・文学研究科教授）